16　Epilogue

● お礼

妻の病気に関しては,「癌難民」としてさすらったためか，多くの医療機関と関係者の手を煩わせた。訪れた医療機関は保健所の検診を始めとして，診察・検査・治療・手術をしたものを数えると，看取りをしたT病院まで十指に余る。この記録に登場した，診察や治療・手術をしてくれた主な医師は20人以上である。それを支えたstaffはさらに数倍する。

そのほとんどの人々は熱心に妻の病状を訊き，何とか命を延ばそうと努力してくれた。それは職務としてだけでなく，人間として医療に携わる心を持っているからだと思う。ただその中にも，医療に携わっている自負を責任感などに表すのではなく，患者より優位に立っていると誤解している人がいたことは確かである。その何人かによって，妻の命が縮んだとは言えないが，QOL(生活の質)が低下したのは事実である。妻の命を支えることに尽力してくれたこれらの医療人に心から感謝する。

総じて日本の医療は，自分や家族が患者になったことが少ない方々が決めている医療体制が悪いのであって，個々の医療人は誠意を持って真剣に患者の救済に取り組んでいる。その意味では，代替医療で金儲けを企んでいる人々のほうがはるかに倫理的に問題があると思われる。

● 費用

妻は最後の入院の前に,「一生の病院通いのほとんど全部をこの1年半でやってしまった。たくさんお金を使ってしまってごめんネ。」と言った。

実際にそれまで妻が払った健康保険料は会社負担分を加えると今回健康保険で支払われた額を遥かに越えている。妻は病院というものは，歯医者と出産および健康診断の精密検査以外には行ったことがない。前2者はかなりの部分が自費である。すなわち，今回のために過去に営々と保険料を積み上げて来たのである。実際には，政治家の人気取りと役人の給料，開業医の高額収入にそれらの保険料は使われてしまった。

バラ撒きの結果として健康保険財政は悪化し，保険給付はどんどん下がったため，家族が看護のために使った費用までも加えると多額の自己負担が必要となった。妻の病気の総費用は埋葬の費用まで加えると800万円以上となった。ほんの僅かの高額医療費の補助を入れても，簡易保険や癌保険，生命共済など少額の保険しか入っていなかったのでとうてい賄いきれなかった。住宅loanなどが残っていて手持ちの現金がなかったら，二人の思いがこもった別荘を売るかサラ金にかけ込む運命だったろう。癌保険だけは，結婚以来毎年払った額の合計額よりたくさん支払われた。

年金だけでなく医療保険も破綻しているのだ。低所得者を中心とした社会福祉としての医療保険と自己責任を旨とした医療保険や(税制上の配慮がある)医療貯蓄に分けるように改革しないと，全国民平等を掲げた日本の社会主義的医療制度は，結局給付できる医療を最低水準に合わせるという形に追い込まれるであろう。今回，世界で試されている医療を患者側が選択するのは容易ではない，という事実を知り，私は歯噛みした。他の業界，たとえば私のいるcomputer業界では，世界の最新技術を最安値で何処からでも入手できる。医療もそのような方向に進むべきであろう。

● 弔問

妻が亡くなったことは，主に妻の友人・知人と私の関係するところで妻を知っている人には，火葬後すぐに知らせた。私が知らない友人は，年賀状の返事で挨拶した。

英国やNew Zealandからはるばる電話を掛けてきてくれた中国人の友人，すぐ駆けつけてくれたり電話や電子mailで弔意を表した人，黙って香典や献花，供物を送ってくれた人，心暖まる励ましの手紙をくれた人など，様々な人々の訃報に対する接し方が垣間見れた。中には，こちらが向こうの家族の葬儀に参列したにもかかわらず，知らぬ顔をした人，人の死を無責任なうわさ話として広げるだけで，対面した時には何の弔意も表さない人もいた。

このようなことがあると，人の心情が読み取れて面白い。だいたいは普段感じている通りの反応を示すが，表面上の付き合いが上手いだけの人，気が弱いので優しく見えるがじつは冷たい人，普段の言動とは裏腹に心が温かい人，など人の心の中を覗いたような気分だった。知らせが遅れた妻と同い年の親戚の態度が一番悪かったのが印象的だった。四十五日までには弔問は一応終わり，わが家には静寂が戻った。百ヶ日を過ぎて，分骨を墓に納め，相続や保険などの処理が終ると年末になった。

妻が私に課した仕事であるこの闘病記もようやく書き上げた。内容には不十分な処もあるが，読者のことを考えてかなりの部分は割愛した。書き終えて感じたことであるが，妻は,「世の人のために。」と言ったが，私自身のためでもあった。これを書くことによって私自身が妻を失ったという事実に対面し，空虚になった心を満たすことができる，と考えてたのであろう。

この闘病記を全部ご覧いただいた方には，拙い文章と独断に付き合っていただき，謝意を表します。

完

©2004 Dr.YIKAI